

## 原 著 論 文

# 妊娠期の母親の**Maternal Confidence**を育成する 看護介入プログラムの開発

## Development of a Nursing Intervention Program to Promote Maternal Confidence in Anticipating Mothers during Pregnancy

岩 崎 順 子 (Junko Iwasaki)\*

野 嶋 佐由美 (Sayumi Nojima)\*

### 要 約

Maternal Confidenceは、母親として【子どもの健康の保持・増進】【子どもとの生活に関する行動】【子どもとの生活に関する知識】【子どもの理解に関する感受性】【育児に関するマネージメント】に対する能力に関する主観的な捉えと定義づけられ、母親になる過程を導くための重要な概念である。そこで、本研究は、妊娠期の母親のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムの開発を目的に研究をおこなった。研究対象者は、妊娠35～36週の初産婦5名であり、集団での学級による看護介入プログラムを実施し、対象者の言動・反応について観察する参加観察を行い質的に分析を行った。結果、対象者は他者との交流を行いながら積極的に学級へ臨んでおり、具体的な技術体験の場面では、モデル人形に自ら進んで語りかけ、愛着が育くまれる場面もみられた。これらの参加観察の結果の分析より更に具体的な各局面への看護介入が示唆された。

### Abstract

Maternal Confidence is defined as subjective perception on the ability as a mother for 1) maintenance and improvement of the infant's health, 2) behaviors related to infant care, 3) knowledge about infant care, 4) sensitivity toward and understanding infants emotional needs, and 5) Managing daily life with an infant. The purpose of this study is to create a new nursing intervention program to promote Maternal Confidence during pregnancy. Subjects of the study were five primiparas in 35-36 weeks. Nursing intervention program class was carried out in group. This study observed behavior-reaction of the subjects in class, and data were qualitatively analyzed. Results showed that the subjects participated actively while performing interactions with others and were able to lead to Confidence. The subjects spoke willingly and touched the model dolls, attachment increased. The aspects of promotion for the nursing intervention program was suggested.

キーワード：Maternal Confidence 看護介入プログラム 母親

### I. は じ め に

近年の、母子保健および育児を取り巻く状況は、母子保健の水準が大幅に改善する一方で、晩婚化や未婚率の上昇、子育て世代の家族形態が多様化する等、大きな変化がみられている<sup>1)</sup>。国は「健やか親子21」を掲げ、「すべての子ど

もが健やかに育つ社会」に向けて子育て・健康支援に取り組んでおり、平成27年度からは、新たな計画が開始されている。看護専門職も、母親が子どもを産み育てることを支援する重要な役割を担っていかなければならない。

一方、妊娠・出産・育児に関する研究領域では、Maternal Confidenceが母親となる過程に深

\*高知県立大学看護学部

く関与しているとして注目されている。Maternal Confidenceは、母親になる過程は学習や経験により導かれるものとして注目しており、母親になることが、先天的な要因ではなく、妊娠・出産・育児といった過程で獲得されるという理論的な根拠となっている<sup>2)3)4)5)6)7)8)9)</sup>。Maternal Confidenceの概念は、Self-Efficacyの理論やRubinの理論から定義づけられており、母親としての課題や取り組み、子どもとの関わり、そして、母親としての成長発達に関連しており、母親が母親としての行動を行うにあたって自分が行動をとる能力があるとする主観的なとらえとして、母親になる過程を導くための重要な概念である。本研究者の出産後4カ月における母親のMaternal Confidenceに関する先行研究<sup>10)</sup>より、Maternal Confidenceの局面として、母親としての子どもの世話に関連する【子どもとの生活に関する行動】【子どもとの生活に関する知識】、子どものニーズや理解に関する【子どもの理解に関する感受性】、育児の課題や状況に対する効果的な調整といった【育児に関するマネジメント】、子どもの健康、成長・発達への関わりといった【子どもの健康の保持・増進】をふくんでいる。また、Maternal Confidenceを育成する看護介入として母子相互作用に注目し、焦点をあてた研究がいくつか報告されている。子どもへの合図の敏感性は親子相互作用の成功の要素であり、海外では親たちにブラゼルトン新生児行動評価を用いて新生児の能力や行動特徴を教え実践してみせる介入が行われている<sup>11)</sup>。本国においても前原<sup>12)</sup>は「母親役割の自信を高める看護介入プログラム」として母子相互作用に焦点をあて「わが子の合図をよみとる敏感性を高める看護援助」として「わが子の表情・言動・生理的反応への気づきを促す」「わが子の哺乳欲求をよみとる能力を高める」等の看護援助の視点を導きだしており、看護介入後、対象者はわが子の合図をよみとる自信が有意に高まったと報告している。

その他、我が国では、Maternal Confidenceに関する研究として影響要因、質的研究、対児感情の変化との関連および、Maternal Confidence

の質問紙の検討といった視点から研究がなされてきている<sup>13)14)15)16)17)18)19)20)</sup>。しかし、Maternal Confidenceを育成するための系統的な看護介入は明らかにされていない。そこで、本研究では、妊娠期における母親のMaternal Confidenceを育成する看護教育プログラムを開発・実施し、有用な看護介入を明らかにする。

## II. 研究の目的

本研究では、妊娠期の母親のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムの開発を目的とし、1) Maternal Confidenceを育成する看護介入プログラムを作成する、2) Maternal Confidenceを育成する看護介入プログラムの実施、参加観察によりプログラムの有用性を検討する。

## III. Maternal Confidence看護介入プログラムの開発

### 1. Maternal Confidenceを育成する看護介入プログラム

本研究では、本研究者の先行研究<sup>10)20)</sup>より、Maternal Confidenceを、母親として【子どもの健康の保持・増進】【子どもとの生活に関する行動】【子どもとの生活に関する知識】【子どもの理解に関する感受性】【育児に関するマネジメント】に対する能力に関する主観的な捉えと定義づけた。

#### 1) 妊娠期のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムの目標

妊娠期におけるMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムは、母親が母親としての主観的な捉えを高めると共に、育児に向けて前向きに、楽しくやっていけると思うことができることを目標とする。局面に【子どもの健康の保持・増進】【子どもとの生活に関する行動】【子どもとの生活に関する知識】【子どもの理解に関する感受性】【育児に関するマネジメント】を含んでおり、各局面の目標を表1に示す。

表1 妊娠期のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムの目標

局面	目標
Maternal Confidence	母親が母親としての主観的な捉えを高めると共に、育児に向けて前向きに、楽しくやっていけると思うことができる
【子どもの健康の保持・増進】	子どもの健康の保持・増進にむけて母親として自信をもって臨むことができる
【子どもとの生活に関する行動】	子どもとの生活に関する行動にむけて母親として自信をもって臨むことができる
【子どもとの生活に関する知識】	子どもとの生活に関する知識について確認し母親として自信をもって臨むことができる
【子どもの理解に関する感受性】	子どもの情緒や特徴について理解することで母親として自信をもって臨むことができる
【育児に関するマネジメント】	育児に関するマネジメントを高め母親として自信をもって臨むことができる

## 2) 妊娠期のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムの内容と方法

妊娠期のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムは、グループダイナミクスを生かした4～5名程度の集団での実施とした。妊娠期であり、対象者への身体的負担も考慮し、10分程度の休憩をはさみ所要時間は合計90分程度とした。また、看護介入プログラムは、Maternal Confidenceの各局面への看護介入を作成し、妊娠期のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムに向けて合計40枚のスライドを作成した（資料1）。

## IV. Maternal Confidence看護介入の実施

### 1. 対象者

県内の病院を受診し、初産婦で、妊娠経過が概ね順調な妊娠末期の妊婦を対象とした。データ収集期間は平成26年10月～平成27年2月であった。対象者は、年齢20～40代で、妊娠週数は35～36週の初産婦5名であった。また、妊娠中、1名のみ妊娠初期に切迫流産の合併症があった（表2）。

### 2. データ収集方法

同意が得られた対象者5名に対して「妊娠期にある母親のMaternal Confidenceを育成する教育プログラム」を実施した（所要時間：所要時間90分、途中休憩10分程度）。学級中、学級内での対象者の言動・反応について観察する参加観察を行い、記録し質的に分析を行った。参

加観察は、他の研究協力者1名が観察し記録を行うとともに、研究者は、看護介入の実施を行うことを主としながら、一部観察を行った。また、倫理的配慮として本研究の実施にあたっては、高知県立大学看護学部研究倫理審査委員会に申請し、承諾を得るとともに研究参加者の対象施設での倫理審査委員会の承諾も得た。研究参加者に対しては文章および口頭で研究の目的と主旨を説明し、自由意志での参加であること、途中、中断や撤回が可能であるとともに、それに伴う不利益を被ることはないこと、プライバシーの保護、対象者への心身の負担の軽減への配慮をおこなった。

### 3. 5つのMaternal Confidence局面での看護介入、対象者の反応（表3）

#### 1) 【子どもの健康の保持・増進】

この局面は、子どもの健康の保持・増進に向けて理解を深めるための看護介入であり、胎児・新生児モデルを使用し1. 子どもの成長に関する理解 (1)胎児期からの成長・発達：胎児期からの子どもの成長・発達についての説明的介入、(2)新生児期の成長・発達：新生児期における子どもの成長・発達についての説明的介入、(3)母親の胎内環境における発育：妊娠初期より母親の胎内において子どもが成長してきたことを伝えていく、2. 子どもの健康に関する気がかり事項：子どもの健康に関する気がかり事項は育児の中で必ず生じてくることを説明し、肯定的な捉えとなるように説明的介入を行う看護介入を実施した。

資料1 妊娠期のMaternal Confidenceを育成する看護介入プログラムのスライド内容

NO	スライド内容
1	表紙『母親としての自信 (Maternal Confidence) を育むために』
2	妊娠末期の Maternal Confidence を育成する看護介入プログラムの目的
3	妊娠末期の Maternal Confidence を育成する看護介入プログラムの内容
4	1. 出産・育児に向けて (タイトルスライド)
5	出産・育児への思い (フリートーク)
6	妊娠・出産・育児の体験について
7	妊娠・出産・育児の体験を通し母親としての成長
8	2. 子どもの健康を育んでいくために (タイトルスライド)
9	1) 子どもの成長：胎児期からの成長発達
10	子どもの成長：新生児期からの成長発達
11	子どもの成長を通した母親としての自信
12	2) 新生児のイメージ (フリートーク)
13	新生児の身体的特徴
14	子どもの健康に関する気がかりへの保障
15	3) 新生児の抱き方 (参加モデリング)
16	飲ませ方 (参加モデリング)
17	おむつ交換 (参加モデリング)
18	子どもの健康を育むために
19	3. 子どもの理解にむけて (タイトルスライド)
20	赤ちゃんからのメッセージ
21	1) 赤ちゃんの五感：視覚・聴覚
22	赤ちゃんの五感：嗅覚・味覚・触覚
23	2) 赤ちゃんのこころの発達
24	3) 赤ちゃんの泣き方
25	なぜ泣くの？
26	泣き方の個性
27	泣きかたを見分ける目安
28	子どもの理解を通しての母親としての自信
29	4. 育児と生活 (タイトルスライド)
30	1) 赤ちゃんがいる1日の生活
31	出産後の1日の生活
32	育児と生活の調整
33	2) 育児と生活の調整を通しての母親としての自信
34	3) 自分自身のこころとからだのために
35	自分自身の心身を大切にしながら育児に取り組んでいく
36	5. これからの育児にむけて (タイトルスライド)
37	妊娠・出産・育児期の体験を通しての母親の成長
38	自信を持って育児に臨んでいくために
39	今度の育児に向けて (フリートーク)
40	お母さん方へ (プログラム終了)

表2 対象者の概要

Case	年 齢	妊娠週数(週)	妊娠時合併症	家 族 構 成
1	40代	36	なし	核家族
2	30代	35	切迫流産	核家族
3	20代	35	なし	核家族
4	30代	35	なし	核家族
5	30代	35	なし	核家族

表3 妊娠期におけるMaternal Confidenceを育成する看護介入による対象者の反応

	項目	Case1	Case2	Case3	Case4	Case5
導入	1) 自己紹介 2) 出産・育児に向けて (1) 出産育児に向けての思い (2) 妊娠・出産・育児の体験 もと好きですが妊娠してからにはもぐもぐしていません。自らが進んで話をされる「高齢で出産できるのかなと思います。友達に聞くとても痛い。生まれたらかわいいと本当に思えるようになるのか自分自身が変わるのかなと思います」途中より笑顔で話される	緊張した様子で話しをされる。「高齢なので、周りが大変だっという話話を聞くので心配です。ダイビングがもともと好きですが妊娠してからにはもぐもぐしていません。自らが進んで話をされる「高齢で出産できるのかなと思います。友達に聞くとても痛い。生まれたらかわいいと本当に思えるようになるのか自分自身が変わるのかなと思います」途中より笑顔で話される	終始笑顔で話しをされる。「里帰り実家で話しをされ、ごろごろしています。愛求といるときは一番癒されます。今日は色々勉強していきたいと思います」他者の話に耳を傾けている。リラックスしている様子	にこやかに自己紹介をされる。「赤ちゃんが生まれてくるのが楽しみです。出産が怖いですとか不安とか全くないです。早く会いたい」他者の話に相手をうち聞いている	緊張した様子で「結婚9年目で二人の生活でいいと思っていた時期でした。まも元々子どもはほしくないという話を聞きますが、本当にそうなのかなあとあります。今日は色々学んでいきたいです」母乳が本当に出るのかなあとそれが心配です」スライドをつめながら話しをされる	少し緊張した様子で「私も、だんななどときが一番癒されます。ほっとする。子どもができて聞きますが、本当にそうなのかなあとあります。今日は色々学んでいきたいです」母乳が本当に出るのかなあとそれが心配です」スライドをつめながら話しをされる
健康保持増進 生活行動 生活知識	1) 子どもの成長に関する理解 (1) 胎児期からの成長・発達 (2) 新生児期の成長・発達 (3) 母親の胎内環境における発育	(胎児モデル)「へえ、すごい」と関心を示す。前のめりになって自ら胎児モデルを優しく触る。「小さいですね」他者に語りかけながら触れられる。(1年までの新生児の発達について)「すごいですね」うなずきながら聞かれている	興味をもって胎児モデルを触る。「すごい、こんなに重たいんですね」お腹にあてて「こっちをけているんですね」と質問される。他者の顔をみながら笑顔で話される(1年までの新生児の発達について)「すごいですね」	(胎児モデル)「小さい。こんなに形になっているんですね」「こんなのがお腹に入っていたんですね。すごい」「こんなに重かったんだ」と話され自ら進んで抱っこする。興味をもって聞いている	静かにうなずき、他者の意見を聞いている。他者が胎児モデルに触っているのを見て「モデルに手を伸ばし触る(1年までの新生児の発達について)静かに聞いている。他者の意見に聞いている	(8カ月の胎児モデルを抱いて)「1500g?こんなに重い?」驚いた様子で他者に「すごいですね」と話しかけている。他のモデルについても積極的に触る(1年までの新生児の発達について)頷いて聞いている
	2) 新生児の理解 (1) 新生児の特徴(2) 子どもの健康に関する気がかり	赤ちゃんの本など読みますか)との語りに「はい」とうなずきながら聞いている	赤ちゃんの本など読みますか)との語りに「はい」とうなずきながら聞いている	興味をもって聞いている。所々首をかしげる仕草がみられる。表情穏やか	静かに頷いている。他者の意見に聞いている	赤ちゃんの本など読みますか)との語りに「はい」と頷く
	3) 新生児の抱き方・飲み方・おむつ交換 3) 子どもの健康を育むために 1) 声かけ・タッチング 2) 自分なりの育児方法の習得	新生児のモデル人形がでてくると自然に抱っこする「かわいい」と話され、人形をみつめる。他者の様子をみながらほほえんでいる。胸部分の着衣脱衣に苦戦「難しい…」と話されるが夢中になっを着脱を実施する。途中、説明を受けながら実施。実施後、ほっとした表情がみられる。他者と雑談している	新生児モデル人形を抱っこすること「こんなに体重が重たいんですか」と聞かれる。自分の胎児と比較して「今2800gなので、まだ大きくならないですね」と笑顔。(おむつ交換)他者の様子もみながら実施される。終了後「大変ですね」笑顔で他者と話をされる	「かわいい」と話し終始抱っこし、モデル人形の顔を見つめて聞いている。「かわいくなつてきまじい」と笑顔で、モデル人形の顔をでなでながら話をされる。オムツ交換は他者を見ながら実施する。「かわい」と話される	自然と新生児モデルを抱っこされ、みつめている。静かに「何グラムですか?」と聞かれ、他者の話を聞いている。おむつ交換は手際よく実施される。おじいさんおばあさんのあはれと違いますよね」大丈夫です」とスムーズに実施される	自然と新生児モデルを抱っこされ、みつめている。「重い、重い」「何グラムですか?」と聞かれ、他者の話を聞いている。おむつ交換は手際よく実施される。おじいさんおばあさんのあはれと違いますよね」大丈夫です」とスムーズに実施される
休憩		休憩中、自ら質問される「赤ちゃんのお布団で毛布はいりますか?」学級最初は、言葉数が少なかったが自ら進んで話しをされる。休憩中も色々に、家族ことなど積極的に話をされる	「肌着ってたくさんいりますか?」「ベビーバスは準備した方がいいですか?」など、他者の質問を受けて更に質問される。にこやかに話しをされる。他者の話を聞いている	他者の話しをにこやかに聞いている	「この間、夜間にお腹が痛くなつてあせったんです。準備も全然してないし・・・(前駆陣痛の話しをされる)」他者の質問にも答えられる	「破水ってわかりますか?」「陣痛はいつもと違いますか?」「荷物はどんなのを準備したらいいですか?」と様々に質問される
感受性	1) 新生児の五感 2) 児の理解に向けて	興味をもって聞いている。途中うなずきながら聞いている。五感については「へえー」と驚きながら興味をもって聞いている	興味をもって聞いている。途中うなずきながら聞いている。五感については「へえー」と驚きながら興味をもって聞いている	興味をもって聞いている。途中うなずきながら聞いている。五感については「へえー」と驚きながら興味をもって聞いている	興味をもって聞いている。途中うなずきながら聞いている。五感については「へえー」と驚きながら興味をもって聞いている	興味をもって聞いている。途中うなずきながら聞いている。五感については「へえー」と驚きながら興味をもって聞いている
育児メッセージメント	1) 子どもがいる1日の生活のイメージ 2) 育児と生活3) 自分自身の心身を大切にすること	「里帰りをしないんです。実家も近いです。身の回りのこととかはできるかなあ。旦那は自分のこととかはやるけど」スライドをみながら驚いた表情	出産後の生活について「どんなイメージがわかない」スライドをみながら驚いた表情がみられる	出産後の生活について「イメージがわかない」スライドをみながら驚いた表情がみられる	出産後の生活について訪ねると首をかしげる。スライドをみながら驚いた表情がみられる	出産後の生活について訪ねると首をかしげる
まとめ	1) 今後の育児に向けて	「いい意味の手抜きをして余裕をもつていきたい。それが赤ちゃんに伝わってしまふかと思いますが」今まで持っていた不安や疑問も解決できて少し自信をもったように思います。これから家族と協力して大切に育てていきたい」	「怒らず育てたい。休みをとって育てていきたい。着替えやおむつ替えや抱っこが楽しくなった。育児をムリせず楽しんでいきたい」	「いらいらせず、余裕をもつて育てていきたい。着替えやおむつ替えや抱っこが楽しくなった。育児をムリせず楽しんでいきたい」	「実家でしばらくは楽をできるけど、もどってからの不安。実家にいる間に自信をつけたい」「今日の話を聞けて色々な不安が解消された。」	「一人で頑張らないようにみんなに助けてもらいながらやりたい。一度も経験したことのないオムツ交換を経験する事ができて少し自信になった。色々な質問がしやすいかった」

対象者は、胎児モデルに対して興味をもって前のめりになって自ら触る場面がみられ、胎児モデルを抱き、腹部にあてながら「こんなに重たいんですね」との発言が聞かれた。Case 3においては「かわいい。かわいくなってきました」と愛着形成が育まれる場面もみられた。胎内からの児の発達に関して対象者全員「すごい」と驚きながら成長を感じることができていた。また、対象者同士、他者の反応や意見を聞きながら、話しをされる場面もみられており、興味をもって臨む姿がみられた。

## 2) 【子どもとの生活に関する行動】

この局面は、子どもとの生活に関連しながら母親が、生活行動に関する理解を深めるための看護介入であり、1. 新生児の抱き方・飲ませ方・おむつ交換：モデル人形を用いて、実際に抱き方・飲ませ方・おむつ交換を実施し、その後、参加者が実施し体験する、2. 子どもの健康を育むために、1) 声かけ・タッチング：母親の声掛けやタッチングが児にとって大きな成長につながることを強調して伝える、2) 自分なりの育児方法の習得：育児は最初うまくいかない事も多いが、何度も繰り返す中で段階をおって獲得されていくことを伝える看護介入を実施した。

対象者は、全員、積極的な参加がみられた。実際の技術体験では、研究者のモデルを模倣しながら取り組む姿勢がみられ、手際よく実施できる対象者と時間をかけて実施する対象者がみられた。実施後、「難しい」「大変ですね」「できた」などの様々な反応がみられた。また、技術に関して、学級後の感想においてCase 3は新生児の衣服・オムツ交換が「楽しかった」、Case 5は初めてのオムツ交換の経験を通して「少し自信になった」との意見が聞かれており、具体的な技術体験が自信を育んでいた。技術体験中、声かけ・タッチングの重要性について説明を行うと、うなずき更にモデル人形に声かけやタッチングされる姿がみられた。

## 3) 【子どもとの生活に関する知識】

この局面は、子どもとの生活に関連しながら生活知識に関する理解を深めるための看護介入であり、1. 新生児の理解、1) 新生児の特徴：

新生児の特徴について参加者が自己表現することでのイメージ化の促進、新生児の大まかな特徴についての説明的介入、2. 現在および育児知識に関する疑問の対応・解決に関する看護介入を実施した。

対象者は、新生児の特徴に関する説明では、静かに聞いている姿がみられた。Case 3は時折、首をかしげる仕草がみられ、十分に理解できていない側面もうかがえた。また、育児本からの知識の習得に関する質問では、全員、頷く姿がみられており、理解している様子で聞かれていた。他の局面への看護援助と比較して比較的静かに聞かれており、対象者同士の関わりもみられなかった。また、現在および育児知識に関する疑問については、途中、休憩場面を利用して看護介入を実施した。各対象者、積極的に質問が聞かれており、Case 4、5は陣痛や破水、分娩前準備物品に関する質問が聞かれた。Case 1、2は、新生児の肌着や布団に関する質問が聞かれた。対象者は他者の質問や回答に興味をもって聞いており、他者の質問を受けて、さらに新たな質問をと、相互作用の中で、疑問をふくませ確認しあっていた。学級半ばでの関わりでありCase 1は当初、言葉数が少なかったが、自ら進んで話しをされる姿がみられた。また、Case 3は、自ら質問は聞かれなかったが、他者の話をにこやかに聞かれている様子もみられた。

## 4) 【子どもの理解に関する感受性】

この局面は、子どもの情緒や特徴についての理解の促進にむけた看護介入であり、以下の教育内容・教育方法を行った。1. 新生児の五感、1) 視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚：新生児の五感についての具体的な説明的介入、2) 新生児のこころの発達：新生児は声掛け等の外的刺激に関して理解しており、また、快・不快といったニーズ・感情を豊かにもっていることについての説明的介入、3) 新生児の泣き：新生児の泣きについて、泣きの種類、泣くことの意味、泣き方の個性、泣き方を見分ける目安についての具体的な説明的介入、2. 児の理解にむけて、1) 児を理解していくこと：児に注目し理解していくことが母親としての自信につながっていくことについての説明的介入、2) 児の個性の理

解：児は、それぞれ個性をもっていることについての説明的介入、3) 成功体験の活用：児の関わりの中で、成功した体験を大切にし、育児に取り入れながら活用してく事についての提案に関する看護介入を実施した。

対象者は興味をもって、スライドを熟視している姿がみられた。終始、スライドに注目しており、時折、頷きながら、各自聞いている姿がみられた。新生児の五感に関するスライドでは驚きながら頷き、話を聞かれていた。

#### 5) 【育児に関するマネージメント】

この局面は、育児について日々の生活に関するマネージメントの促進にむけた看護介入であり、以下の看護介入を実施した。1. 子どもがいる1日の生活のイメージ：出産後の子どもとの生活に関して参加者が自己表現し、イメージ化できるような関わり、2. 育児と生活、1) 育児と生活の調整：育児と日々の生活における工夫・調整についての提案、2) 子どもがいる生活に向けた準備：子どもがいる生活をイメージしながら具体的な生活準備をおこなっていくことの提案、3) 家族での役割調整：子どもがいる生活について家族も共に生活に関するイメージを共有し役割調整を行っていくことの提案、4) 日々の繰り返しの体験による工夫・調整：最初はいまうまくいかないことも日々の育児の繰り返しの中で、工夫し調整できるようになることを強調して伝える、3. 自分自身の心身を大切にする、1) 心身のリラックス：日々の育児に追われる中で自分自身の心身の緊張をゆるめ、リラックスできる方法についての提案、2) 心の余裕：母親の心の余裕が楽しい育児につながっていくことについての説明的介入に関する看護介入を行った。

対象者は、出産後の生活について「イメージがわからない」との発言が聞かれ、具体的な生活に関して驚きの表情がみられた。Case 1はスライドを通して自らの産後の生活をイメージする場面もみられた。対象者はそれぞれ、様々な産後のマネージメントに関する工夫・提案については頷きながら聞いている姿がみられた。また、学級後の感想において、Case 5は、家族を含めた他者への協力について積極的に取り組んでい

く姿勢がみられた。また、自分自身への心身を大切にする関わりについて、Case 1は「いい意味の手抜きをして余裕をもっていきたい」、Case 2は「休みをとりながらリラックスを大切に」と語られる場面があり、出産後の生活の理解、生活への取り入れがイメージできていた。

#### 4. Maternal Confidenceの基盤となる看護の構え

Maternal Confidenceを育成する看護介入とともに、Maternal Confidence看護介入を根底から支える基盤となる看護の構えが抽出された。

本学級では、少人数による看護介入の実施であり、Case 1は最初、発言が少なかったが徐々に積極的に臨む姿勢がみられていた。学級は、終始、和やかな雰囲気での開催であり、対象者はそれぞれリラックスして参加ができていた。安心した場での開催により、対象者は他者と同じ思い・悩みへの共感から多様性・柔軟性の育成といった新たな気づきがみられた。参加した対象者は「みな同じなので安心しました」と述べられており、自由に語れる場の環境作り、自己の気づきの促進にむけた「安心を支える看護の構え」が抽出された。

また、対象者の反応は様々であった。Case 1は高齢初産であるが故の不安を抱えており、Case 4は物静かな印象であり、発言は比較的少なかったが、他者の意見に耳を傾け、納得しながら理解している様子がみられた。対象者個々に応じた疑問への対応、細やかな看護介入の実施として対象者を十分に観察し、常に全体像のアセスメントを行う「個別性に応じた看護の構え」が抽出された。

更に指導者は対象者に共感し、寄り添いながら対象者の意向・価値観を尊重し、保証するとともに肯定的フィードバックを行うことを通して、対象者の強みの発見、主観的な捉えの肯定的意味づけを行い、強みを強化していく看護支援を行った。「肯定・尊重した看護の構え」は、対象者の“できそう”という感覚の発見につながり、自分や子どもの力を信じる根底となる。対象者自身の成長の気づきを通して肯定的な感覚が強化され、Maternal Confidenceを獲得できるような関わりが基盤となる看護の構えとして抽出された。

## V. 考 察

### 1. Maternal Confidenceの各局面を育成する看護介入

#### 1) 【子どもの健康の保持・増進】への看護介入

Maternal Confidenceは【子どもの健康の保持・増進】の局面との相関は高いことが報告されており<sup>10)</sup>、妊娠末期までの期間における、妊娠継続・児の成長・発達や母児の健康状態に応じた対応の体験を通して、母親が自信につながっていくことができるよう支援が重要である。

本看護介入の局面において、胎児・新生児モデル人形を用いた児のイメージ化の促進・理解への支援について各対象者は興味をもって望む姿がみられた。武田らは<sup>21)</sup>、主体的な育児に向けた妊娠期の支援として「赤ちゃんをイメージする」看護介入が重要であると報告しており妊娠期より具体的な子どもの特徴や成長・発達がイメージでき、理解につながる看護介入が望まれる。そのためにモデル人形の活用は有用であると考え。また、児の成長・発達に向けて、新生児および、以後の成長・発達に向けてのイメージ化の促進につながるように、現在までの胎児の発育・発達について、想起することができるような看護支援も同様に重要であると考え。

これらのことより妊娠期における【子どもの健康の保持・増進】に関する看護介入として、《子どもの成長・発達の理解》、《先を予測した子どもの成長・発達のイメージ化》、《新生児の特徴のイメージ化》、《子どもの健康に関する気がかりの理解》が重要であり、これらの側面が抽出された。

#### 2) 【子どもとの生活に関する行動】への看護介入

産褥早期、多くの母親は児の抱き方、排気の方法等、基本的な育児行動について経験がなく、Maternal Confidenceは低く、妊娠中より育児期に向けた具体的な【子どもとの生活に関する行動】への看護介入が重要である。育児経験の積み重なりによる行動の獲得がConfidenceにつながっていくのであり、経験による体験の実施が有用である。本学級では、基本的な育児技術体験（抱っこ・おむつ交換・飲ませ方）を取り入

れており、対象者はいずれも積極的に参加し取り組む姿勢がみられた。手際よく実施する対象者と時間をかけて実施する対象者がみられたが、学級中の雰囲気は和やかであり、対象者はお互いに声をかけながら取り組んでいた。個々のペースに応じた体験ができることが重要であり、育児行動は児との生活の繰り返しの中で徐々に獲得されていくことを体験して、学習につなげていくことが大切である。また、現在できている育児行動を保証・強化しConfidenceにつなげていく支援も重要である。しかし学級内で全ての育児技術を体験することは困難であり、経験を応用し工夫して育児にとりいれることができる支援が望まれる。一つの技術体験を育児期間中に想定されるいくつかの場面に活用できる方法の提案として、例えば新生児の抱き方から沐浴時の保持の方法、あやし方等、拡大して対象者自身が活用できるような工夫も必要である。

また、対象者はいずれも技術演習中、モデル人形に語りかけながら臨む姿がみられた。子どもへの生活行動は、いずれも児との愛着を基本としており、単なる育児技術行動のみの獲得ではなく、児との相互作用の中、児へ愛着を育みながら、育児行動を獲得できるような看護介入が望まれる。

妊娠期における【子どもとの生活に関する行動】に関する看護介入には、《育児技術体験による技術の獲得促進》、《育児技術の保障》、《育児技術獲得過程の理解》、《体験した育児技術の応用・工夫への支援》が重要であり、これらの側面が抽出された。

#### 3) 【子どもとの生活に関する知識】への看護介入

【子どもとの生活に関する知識】について、妊娠中より母親は、児に関連した胎動やマイナートラブル等について不安を抱いており、個別的なケアの提供が望まれる<sup>22)</sup>。しかし、本学級中、母親は、子どもへの語りかけや新生児の特徴に関する看護介入への興味はいずれも乏しく、一般的な児に関する知識は、十分に有しているものと思われる。倉本<sup>23)</sup>は出産後の母親の児に関する不安の具体的内容として「湿疹」「泣き」「不眠」「排泄」等を報告している。母親は児との生活に関連した知識の応用、マネジメント

の側面を含む知識についてConfidenceをもてず  
におり、これらに対する具体的な看護介入が望  
まれる。また、児の衣服、室内の環境は、本学  
級内でも両項目において対象者より質問があっ  
たことから、出産後の育児にむけて知識とし  
て必要な項目であり、具体的な児との生活に  
関する知識の獲得に向けて、説明的介入をおこ  
なっていくことが必要である。

一方Case 3 は、学級内の児の特徴に関する一  
般的な知識の伝達の場面において首をかしげる  
仕草がみられたが、終始にこやかに他者の話  
も興味をもって聞いておられ新生児人形に対  
しても愛着行動が高く、育児について「楽し  
みです」と語られる場面がみられた。この点  
は注目すべき点である。育児への具体的な【  
子どもとの生活に関する知識】への支援は重  
要であるが、知識が豊かに理解できれば、  
Confidenceが高まるかは定かではない。具  
体的な知識と共に、母親として「やってい  
ける」「なんとかなる」といった肯定的な  
捉えができることが重要であり、他の看護  
介入と関連させながらMaternal Confidence  
を高めて行く支援が求められる。また、本  
学級においても対象者は各自、育児雑誌等  
より知識を獲得していた。これらの有して  
いる知識に関する保証を行うとともに、育  
児を行う中で徐々に獲得していくであら  
う過程についても伝えていくことが、  
Maternal Confidenceを高めていくもの  
と考えられる。

これらのことより妊娠期における【子ども  
の生活に関する知識】に関する看護介入に  
は、《現在有している育児知識の保証》、  
《育児知識に関する疑問点の解決》、《具  
体的な子どもとの生活に関する知識》、  
《具体的な育児に関する知識の獲得過程  
の理解》が重要であり、これらの側面が  
抽出された。

#### 4) 【子どもの理解に関する感受性】への看護介入

出産後、母親の心配事として「なぜ泣い  
ているかわからない」「泣いた時にどのよ  
うに対応したらよいかわからない」と多く  
の母親は、児の理解に関して気がかりを  
抱えている。檜森らは<sup>24)</sup>乳児の泣きに対  
する母親の反応として、出産後、母親は  
児の泣きを感じ取り、児の欲求を満たす  
ための行動を繰り返すことで泣きの意

味が理解できるという自信がみられたと  
報告しており、育児を行う過程で徐々に  
獲得されていく局面である。また、母親  
は児の欲求に対し自分の力で適切に応答  
できた経験の積み重ねにより、多くの肯  
定的感情につながると<sup>25)</sup>と報告されて  
いるように、児のことがわかるようになる  
こと、児に応じた対応ができることが  
Confidenceを高めていく。子どもの理  
解に関する感受性の局面もまた、児との  
相互作用と深く関連しており、他の局  
面と関連しながら、高めていく看護  
介入が望まれる。学級中においても、  
愛着行動が高い対象者は、「なんとかな  
る」と肯定的に育児に臨むことができ  
ており、児の愛着と関連し高めていく  
支援も、基盤となる重要な側面である。

学級中、胎児・新生児モデル人形の利  
用を通して、母親は児の愛着がみられて  
いた。モデル人形に触れている時間が  
長いことで、愛着形成にもつながって  
いくのであり、対象者への妊娠期に  
おける身体的負担も考慮し、モデル人  
形の積極的活用が有用であると思わ  
れる。また、学級中、母親は、新生  
児の五感やニーズについて興味をも  
って驚きながら聞かれている姿がみ  
られ、有用な看護介入であるといえ  
る。更に新生児の理解に向けて、様  
々な新生児の泣き声や映像などを取  
り入れ、視覚、聴覚を使う媒体活用  
の検討も必要である。

妊娠期における【子どもの理解に関する  
感受性】に関する看護介入には、《子  
どもの特徴の理解》、《子どものニーズ  
の理解》、《子どもの個性の理解》、  
《子どもの対応の理解》、《子どもに  
応じた対応》、《子どもの理解に関  
する感受性の獲得過程の理解》が重  
要であり、これらの側面が抽出され  
た。

#### 5) 【子どもとの生活に関するマネージメント】への看護介入

【子どもとの生活に関するマネージメン  
ト】について、学級中の母親の語りよ  
りも出産後の生活に関してイメージが  
できておらず、具体的なイメージ化を  
促しながら、マネージメントの側面  
を高めて行く支援が必要である。ま  
た、学級では、出産後の生活の工夫、  
マネージメントについて、家族・他  
者の協力に関して、それぞ

れ対象者自らのケースに置き換えながらのイメージにつながっていたが、個々それぞれの具体的な生活の工夫については、対象者自らが事前に考え、準備性を高めるまでは至らなかった。時間配分もあるが、余裕があれば、具体的な工夫について個々に考え、表現を通してイメージできるように関わりの検討も必要である（各個人の工夫について考えてもらう。産後の1日の生活ボードへの書き込み等）。

また、自分自身の心身を大切にしながらの育児については、対象者それぞれ理解し、出産後の育児において意識して臨む姿がみられていた。余裕のある育児はMaternal Confidenceに大きく影響する重要な看護介入であると考え。その他、育児に関する情報の判断について、学級中、対象者から質問がみられた。育児に関する情報は有しているものの、判断・選択の場面において悩み、その結果、Confidenceが低かったことが考えられる。情報の判断・選択がより円滑に自信をもつことができるような関わりとして正確な情報の伝達、相談の場の検討といった支援もまた重要である。

妊娠期における【子どもとの生活に関するマネージメント】に関する看護介入には、《子どもがいる生活のイメージ化》、《育児と生活の調整》、《子どもとの生活の中でのマネージメント獲得過程の理解》、《自分にあった情報の取り入れ》、《成功体験の取り入れ》、《自分自身の心身の調整への支援》が重要であり、これらの側面が抽出された。

## VI. 本研究の限界と今後の課題

本研究は、Maternal Confidenceの評価として、対象者が5名と少数であったこと、一つの施設からのデータ収集であり、データの偏りがある可能性が考えられる。今後、対象者を広げたMaternal Confidenceの看護介入の実施、および看護介入評価が必要である。また、妊娠期におけるMaternal Confidence看護介入プログラムが広く一般化できるように、臨床の現場での実践への活用に向けて更なる洗練化が必要であると考え。

## 謝 辞

本研究にあたり、ご協力いただきました対象者の皆様と協力施設の皆様に心より感謝申し上げます。本研究は、平成24年～26年度科学研究費補助金基盤研究C（課題番号24593393）の助成を受けて行ったものである。

## <引用文献>

- 1) 厚生労働省：「健やか親子21」の次期計画について検討報告書、厚生労働省ホームページ、2014、rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/pdf/saisyuuhyouka2.pdf
- 2) Mercer,R.,T & Ferketich,S,L : Experiencedand Inexperienced Mother's Maternal Competence During Infancy. Research in Nursing & Health, 18, 333-343, 1995.
- 3) Zhar,L, : The Relationship between Maternal Confidence and Mother-Infant Behaviors in Premature Infants. Research in Nursing & Health, 14, 279-286, 1991.
- 4) Zhar,L : The Confidence of Latina Mothers in the Care of Their Low Birth Weight Infants. Research in Nursing & Health, 16, 335-342, 1993.
- 5) Mercer,R,T, Ferketich,S L, Joseph,J else : Effect of Stress on Family Functioning During Pregnancy, Nursing Research, 37(5), 268-275, 1988.
- 6) Gross. D. Rocissano,L & Roncoli,M : Maternal Confidence during toddlerhood, Comparing preterm and fullterm groups,Research in Nursing&Health. 12-19, 1989.
- 7) Gross,D & Tucker,S : Parenting Confidence During Toddlerhood,Nurse Practitioner25, 29-34, 1994.
- 8) Ruchala PL : Social support, knowledge of infant development, and maternal confidence among adolescent and adult mothers.JOGNN: Journal of Obstetric, Gynecologic & Neonatal Nursing, 26(6), 685-689, 1997.
- 9) Nancy,K,Lowe : Maternal Confidence for Labor. Deveropment of the Childbirth Self-Efficacy Inventory, Research in Nursing&Health., 16, 141-149, 1993.

- 10) 岩崎順子、野嶋佐由美：Maternal Confidenceと家族サポートの関連、家族看護、5(1)、100-110、2007.
- 11) T.Berry Brazelton, J. Kevin Nugent：ブラゼルトン新生児行動評価．第3版、意志薬出版、1998.
- 12) 前原邦江：わが子の合図をよみとる感性性を高める看護援助 産褥早期の母子相互作用のアセスメントから、母性衛生、47(2)、429-438、2006.
- 13) 前原邦江、森恵美、土屋雅子他：出産施設を退院後から産後1ヵ月までに母親役割の自信が高まる要因 高年初産婦と34歳以下初産婦を比較して、母性衛生、56(2)、264-272、2015.
- 14) 小澤治美、坂上明子、森恵美他：産後1ヵ月間の母乳育児推進及び母親役割の自信を高めるための看護介入におけるシステムティックレビュー 日本の高年初産婦への適用に向けて、千葉大学大学院看護学研究科紀要、37、17-26、2015.
- 15) 清水嘉子：生後1歳6カ月の子どもをもつ母親の育児への自信、小児保健研究、74(3)、453-459、2015.
- 16) 小林康江：日本語版「母親としての自信質問紙 (Maternal confidence questionnaire)」の信頼性妥当性の検討、山梨県母性衛生学会誌、9(1)、34-40、2010.
- 17) 鈴木由紀乃、小林康江：産後4カ月の母親が母親としての自信を得るプロセス、日本助産学会誌、23(2)、251-260、2009.
- 18) 小林康江：産後1カ月の母親が「できる」と思える子育ての体験：母性衛生、47(1)、117-124、2006.
- 19) 前原邦江：産褥期の母親役割獲得過程 母子相互作用の経験を通して母親役割の自信を獲得していくプロセス、日本母性看護学会誌、5(1)、31-37、2005.
- 20) 岩崎順子、野嶋佐由美：乳児を抱える母親のMaternal ConfidenceおよびMaternal Confidenceを育成する看護介入に関する文献検討、高知女子大学看護学会誌、40(2)、125-131、2015.
- 21) 武田順子：主体的な出産・育児に向けて地域助産師が行う妊娠期の支援に関する研究、岐阜県立看護大学紀要、12(1)、3-15、2012.
- 22) 遠藤由紀、石井登志子、高梨陽子他：当院セミオープンシステム利用妊婦の不安や疑問の内容と解決方法についての実態調査(第2報)、共済医療、62(3)、276-279、2013.
- 23) 倉本真悠：産後1ヵ月までの育児不安の実態と効果的な支援方法についての文献検討、奈良県母性衛生学会雑誌、27、12-17、2014.
- 24) 檜森千帆、加藤尚美、猿田了子：乳児の泣きに対する母親の反応と対処行動について 生後1ヵ月から4ヵ月までの縦断的研究、日本母子看護学会誌、8(2)、31-42、2015.
- 25) 河野洋子、緒方盛子、菅林直美：育児の困難さから楽しさへの転換を促すものは何か 産後1ヵ月間の育児体験に関する質的研究から、淑徳大学看護栄養学部紀要別冊、25-32、2015.